



Title	国際共同シンポジウムを通じた多様性・ジェンダー平等教育の試み：大阪大学・マヒドン大学・フローニンゲン大学の連携を事例に
Author(s)	カンジャマーポンクン, サティダー; 藤田, 清士
Citation	大阪大学高等教育研究. 2025, 14, p. 63-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際共同シンポジウムを通じた多様性・ ジェンダー平等教育の試み

— 大阪大学・マヒドン大学・フローニンゲン大学の連携を事例に —

カンジャマーボンクン サティダー^{*1}・藤田 清士^{*1}

Fostering Diversity and Gender Equality Education through an International Symposium: A Case Study of Collaboration among the University of Osaka, Mahidol University, and the University of Groningen

KANJAMAPORNKUL Sathida^{*1}, FUJI-TA Kiyoshi^{*1}

2025年3月4日に、大阪大学・マヒドン大学・フローニンゲン大学の3大学による国際共同シンポジウム「Social Creation through Diversity and Gender Equality (多様性とジェンダー平等を通じた共創社会の実現)」が、タイ王国のマヒドン大学サラヤキャンパスにおいて開催された。本稿では、このシンポジウムの開催経緯、企画・運営のプロセス、発表者の多様性および発表テーマの内容に注目し、高等教育機関における多様性と包摂性 (Diversity & Inclusion, 以下D&I) およびジェンダー平等の理解促進に資する教育的意義を検討する。特に、国際連携による実践的な協働が、学生の主体的な学びや異文化理解の深化をいかに促進したかを考察する。

本シンポジウムでは、日本、タイに加え、大阪大学に在籍するベトナム人交換留学生およびフローニンゲン大学に所属するブラジル人学生による研究発表が行われ、教員による基調講演と合わせて、文化的・専門的背景の違いを超えた双方向的な学びが促された。議論を通じて、各国における性教育および性の健康に関する制度的・文化的相違が明らかになり、グローバルな文脈におけるD&I教育の今後の展開に向けた課題と可能性が示唆された。本事例は、高等教育におけるインクルーシブかつグローバルな課題に回答可能な学習環境の共創に向けて、異文化間対話と国際協働が果たす役割を示すものである。

キーワード：多様性、包摂性、ジェンダー平等、国際連携、高等教育、性教育、国際シンポジウム

On March 4, 2025, an international symposium titled *Social Creation through Diversity and Gender Equality* was held at the Salaya Campus of Mahidol University in Thailand, co-organized by the University of Osaka, Mahidol University, and the University of Groningen. This paper examines the educational significance of the symposium in promoting understanding of diversity and inclusion (D&I) and gender equality in higher education, with a focus on its planning process, organizational structure, the diversity of presenters, and the thematic content of the presentations. In particular, it explores how international collaboration and practical engagement fostered student-driven learning and deepened intercultural understanding. The symposium featured keynote lectures by faculty and research presentations by graduate students from Japan and Thailand, as well as a Vietnamese exchange student at the University of Osaka and a Brazilian student affiliated with the University of Groningen. The symposium's sessions facilitated interactive learning that transcended cultural and disciplinary boundaries. Through discussions, notable institutional and cultural differences in

所 属：^{*1}大阪大学国際機構・海外事業推進センター

Affiliation：^{*1}Center for Overseas Operations, Institute for International Initiatives, the University of Osaka

連絡先：k.sathida.cgin@osaka-u.ac.jp (カンジャマーボンクン サティダー)

sexuality education and sexual health policies among countries were brought to light, offering insights into both challenges and possibilities for advancing D&I education in global contexts. This case highlights the role of intercultural dialogue and international collaboration in co-creating inclusive and globally responsive learning environments in higher education.

Keywords : Diversity, Inclusion, Gender Equality, International Collaboration, Higher Education, Sexuality Education, International Symposium

1. はじめに

2000年代初頭以降、特に「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs)」が採択された2015年以降において、高等教育機関におけるジェンダー平等ならびに多様性と包摂性 (Diversity & Inclusion, 以下D&I) の推進は、教育・研究の質的向上と持続可能な社会の構築に不可欠な要素として位置づけられている。中央教育審議会 (2018) による『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』では、大学には「多様性」および「柔軟性」の確保が求められており、その実現は高等教育の制度設計全体に関わる重要な課題とされている。また、大学の国際化戦略の一環として、海外から優れた人材を受け入れ、定着させることは、教育の質的充実と多様性の促進に寄与し、さらには社会の活性化や持続可能な成長にも貢献するとされている (文部科学省高等教育局, 2024)。特に、異文化的な背景を有する学生・教職員が協働するD&I教育は、異なる価値観への理解を深め、グローバルな視野を育む上で極めて有効である (米澤, 2015)。

大阪大学においても、国際連携の一環として2000年代以降、海外各地に拠点を設置し、教育・研究・学生交流を通じた協働の基盤を整備してきた。とりわけ、ASEAN地域においては、タイ・マヒドン大学との協働体制を軸に、教育・研究・学生交流にわたる国際的な連携を積極的に推進しており、近年では同大学における拠点整備を通じて、さらなる連携の深化が図られている。こうした取り組みは、D&I教育の国際的实践を支える基盤の一つとしても重要である。

本稿では、2025年3月4日にタイ王国のマヒドン大学サラヤキャンパスで開催された国際共同シンポジウム「Social Creation through Diversity and Gender Equality (多様性とジェンダー平等を通じた共創社会の実現)」の企画・運営のプロセスと、当日の登壇者や学生による発表内容を概観しつつ、国際的な枠組みの中で大阪大学がD&I教育をいかに展開しているかを明らか

にする。加えて、本シンポジウムが教育的に持つ意義を検討し、高等教育におけるD&I推進の一実践事例としての可能性について考察する。

2. シンポジウム開催の背景と経緯

大阪大学は、2004年に米国サンフランシスコに初の海外拠点を設置して以来、国際連携の強化を目的として海外展開を積極的に進めてきた。その後、オランダ・フローニンゲン (2005年)、タイ・バンコク (2006年)、中国・上海 (2010年) にも拠点を設置し、教育・研究の国際ネットワークを構築してきた。中でも、バンコクに設けられた第3拠点は、2006年に「バンコク教育研究センター」として開設され、2014年には「ASEAN学術イニシアティブセンター (バンコク事務所)」と改称、2017年には「大阪大学ASEAN拠点」へと再編され、機能が大幅に強化された。この拠点は、バンコク市内アソーク地区のSerm-Mit Tower内のサービスオフィスを活用していたが、協定大学との関係をより深化させることを目的として、2023年10月にタイ・ナコンパトム県のマヒドン大学サラヤキャンパス本部棟に移転・設置された。これに先立ち、2023年8月18日には開所式が開催されている。開所式には、マヒドン大学からBanchong Mahaisavariya前学長、Nopraenue Sajjarax Dhirathiti国際担当副学長をはじめ教職員21名が、大阪大学からは田中学理事・副学長 (当時)、山本ベバリー・アン理事・副学長 (当時)をはじめ教職員14名が出席した。

大阪大学とマヒドン大学は、1960年代から50年以上にわたり、研究者・学生の交流や共同研究、国際シンポジウムの共催などを通じて連携を深めてきた。2017年にはマヒドン大学内に大阪大学ASEANキャンパス拠点が整備され、2019年には大阪大学構内にマヒドン大学との国際連携オフィスが設置されるなど、双方向的な体制が構築されてきた。近年では、ASEANキャンパス構想のもと、ジョイントキャンパスオフィスを活用したダブルディグリープログラムや短期型教育・研究プログラ

ムなどが展開されており、教育面での国際的な取り組みも広がりを見せている。2023年にマヒドン大学構内に新たに設けられた「大阪－マヒドンインターナショナルオフィス」は、マヒドン大学の各研究科からの教職員の来訪を促し、大阪大学との研究・教育における協働をさらに活発化させる拠点として機能している（藤田・カンジャマーポンケン・秋永, 2025）。

こうした両大学間の長年にわたる連携の蓄積と、新拠点設置を契機とするさらなる関係強化の機運を背景に、2025年3月4日に「Osaka-Mahidol-Groningen Joint Symposium on Social Creation through Diversity and Gender Equality」（以下、本シンポジウム）が企画された⁽¹⁾。本シンポジウムの構想は、2023年12月にマヒドン大学国際部と大阪大学ASEAN拠点との会談において、「ジェンダー平等およびD&Iをテーマとした国際共同企画の実施を検討したい」との意見交換をきっかけに具体化されたものである。この対話を契機に、ASEAN拠点が中心となってシンポジウムの企画・実施計画が本格的に進められた。本シンポジウムは、大阪大学国際機構（2025年3月31日までは「グローバルイニシアティブ機構」）の海外事業推進センター・海外拠点部門ASEAN拠点が主体となって企画・運営し、大学の国際戦略の一環として実施されたものである。また、もう一つの柱として位置づけられたのが、欧州における連携拠点であるオランダ・フローニンゲン大学との協働である。フローニンゲン大学は、ジェンダー平等およびD&Iに関する取り組みを大学全体として積極的に推進しており、これまでも多文化共生や包摂性を主題とした教育・研究活動を展開してきた。さらに、同大学には大阪大学の欧州拠点が2005年に設置されており、両大学は長年にわたり、人文社会科学や医学など、複数分野において国際共同研究や教育連携を深めてきた。本シンポジウムは、そうした継続的な協働関係と、D&Iに対する共通の関心を背景に、三大学による共催という形で実現されたものである⁽²⁾。

シンポジウム当日は、教員による講演に加え、日・タイ・欧州の大学院生による研究発表およびディスカッションが実施され、ジェンダー平等、セクシュアリティ、教育、福祉といった多様な社会的課題について、参加者がそれぞれの文化的・学術的背景から意見を交わす機会となった。多様な国籍や価値観を持つ若手研究者が対話を通じて相互理解を深めるこのような場は、D&I教育の理念を体現するものであり、本シンポジウムの大きな特徴となっている。このように、ASEANおよび欧州に

おける国際拠点という制度的基盤と、D&I教育を実践する教育の場が連動した本シンポジウムは、国際的な高等教育における多文化協働のモデルケースとして位置づけられるであろう。

3. シンポジウムの概要と構成

本シンポジウムは、2025年3月4日、タイ王国のマヒドン大学サラヤ・キャンパス内のPrince Mahidol Conference Centerにて対面形式で開催された。開会にあたっては、マヒドン大学学長Piyamitr Sritara教授による録画メッセージが上映され、続いて、マヒドン大学国際担当副学長のNopraenue Sajjarax Dhirathiti准教授による歓迎のスピーチが行われた。両者の挨拶では、三大学による長年の国際連携とD&Iの推進に向けた今後の展望が述べられた。大阪大学、マヒドン大学、フローニンゲン大学から発表者・聴講者・運営関係者を含む約45名が参加し、その内訳は教職員約25名、大学院生約20名であった。発表者（シンポジスト）は教員・大学院生を合わせて8名であり、それ以外は主に聴講者として参加した。三大学の参加者によってジェンダーと多様性に関する教育・研究の実践と課題について、活発な議論が展開された。

本シンポジウムは、午前と午後の二部構成で実施され、午前には教員による講演、午後には大学院生による研究発表と共同ディスカッションが行われた。各セッションでは質疑応答や意見交換の時間が設けられ、立場や国籍を超えた双方向的な学びが促進された点が本シンポジウムの特徴である。また、翌3月5日には、マヒドン大学主催によるエクスカッション（文化交流活動）も実施され、シンポジウムの一環として国際的な相互理解とネットワーキングの促進が図られた（表1）。

3.1 午前の部：教員による基調講演

午前の部では、大阪大学、マヒドン大学、フローニンゲン大学から4名の教員が登壇し、それぞれの専門的視点からD&Iに関する講演を行った。まず、大阪大学副学長（当時）の山本ベバリー・アン教授⁽³⁾は、「How Did We Get Here?」と題し、近年の社会的・学術的文脈におけるジェンダーとセクシュアリティ理解の変遷を論じた。LGBTQ+（性的マイノリティを包括する総称）やSOGI（性的指向と性自認：Sexual Orientation and Gender Identity）といった概念の普及に加え、トランスジェンダーへの反発やフェミニズム内部の緊張関係といった課

表1 シンポジウムおよびエクスカージョンのプログラム構成（筆者整理）

2025年3月4日	
時間	プログラム内容
9:00	受付
9:30	・開会の挨拶（録画メッセージ：マヒドン大学学長のPiyamitr Sritara教授） ・歓迎の挨拶（マヒドン大学国際担当副学長のNopraenue Sajjarax Dhirathiti 准教授） ・記念品贈呈・集合写真
9:45	基調講演①：山本ベバリー・アン教授（大阪大学） 「How Did we get here? An exploration of shifting social and scientific understanding of sexuality and gender.」 基調講演②：Thomas E. Guadamuz 准教授（マヒドン大学） 「Resilience through Inclusion: Redefining Gender and Sexuality in Society」
10:45 – 11:00	コーヒーブレイク
11:00	基調講演③：Mónica Lopez Lopez 教授（フローニンゲン大学） 「Beyond rejection: Building resilience for LGBTQIA+ youth across systems」 基調講演④：知念歩准教授（大阪大学） 「The Struggles of Mothers and Children in Education: How Do Social Welfare systems shape Gender Relations?」
12:00	Q&Aセッション
12:00 – 13:00	昼食
13:00 – 14:30	大学院生による研究発表（各学生15分）※非公開セッション 発表①：松本ミユ氏（大阪大学大学院） 「School based sexuality education in Japan and human resource development」 発表②：Itsada Ketsuwan 氏（マヒドン大学大学院） 「Social suffering among gay men, ladyboys and trans women living with HIV in Bangkok」 発表③：Gabriel Castro Siqueira 氏（フローニンゲン大学大学院） 「Between Trauma and Resistance: Purpose, Pride, and Pleasure in the Lives of Trans and Gender Diverse Activists in Brazil」 発表④：Min Chau Pham 氏（大阪大学大学院） 「Communication between parents and children about sexuality in Vietnam」
14:30 – 16:30	ディスカッション（教員・学生によるクロスディスカッション）
16:30 – 17:00	閉会挨拶・記念撮影
2025年3月5日	
9:30 – 11:30	王宮・エメラルド寺院（ワット・プラケオ）見学
11:30 – 12:30	チャオプラヤー川でのボート移動を含む文化体験
12:30 – 14:00	昼食・現地文化交流

題にも触れ、複雑な社会的力学を読み解く視座を提供した。続いて、マヒドン大学熱帯医学部のThomas E. Guadamuz 准教授は、「Resilience through Inclusion」をテーマに、包摂（Inclusion）を通じた社会的レジリエンスの形成と、タイにおける性的マイノリティの状況について講演を行った。フローニンゲン大学のMónica Lopez Lopez 教授は、「Beyond Rejection」と題して、欧州およびラテンアメリカ諸国におけるLGBTQ+の若者をめぐる教育・福祉制度の課題と支援の可能性を紹介した。最後に、大阪大学人間科学研究科の知念歩准教授は、「The Struggles of Mothers and Children in Education」をテーマに、日本の教育システムにおける母親と子どもを取り巻く構造的困難と、それに対する社会制度のあり方について考察を行った。

3.2 午後の部：大学院生による研究発表と共同対話

午後の部では、日本、タイ、オランダから4名の大学院生が登壇し、自身の研究テーマに基づいた発表を行った。本セッションは、プライバシーおよび発表内容の機微性に配慮するとともに、議論の自由を確保するため、限られた参加者のみによる非公開形式で実施された。発表テーマは、学校における性教育（日本）、HIV陽性者を含むタイのLGBTQ+コミュニティの社会的経験、ブラジルにおけるトランスジェンダー活動家のレジリエンス、およびベトナムにおける家庭内性教育の文化的背景など、多様な文化圏と切り口からD&Iに接近する内容であった。発表後には、午前中に講演を行った教員を含めたクロスディスカッションが行われた。このセッションでは、文化的背景の違いに起因する価値観の相違や共通点、性やジェンダーに関する言語表現における文化的

配慮などについて活発な意見交換が行われた。学生同士および学生と教員との間で対話が促進されたことで、D&I教育の理念が体现される場となった。なお、本稿においては、当日のプログラムやポスター等を通じて氏名が公開されている登壇者についても、記載内容は発表に基づく事実のみに限定し、記述にあたっては過度な個人情報に触れないよう十分に配慮している。

3.3 交流活動：エクスカージョン（3月5日）

翌3月5日には、マヒドン大学主催によるエクスカージョンとして、バンコク市内の王宮、エメラルド寺院（ワット・プラケオ）などの文化遺産を訪問する半日ツアーが実施された。チャオプラヤー川を船で移動するルートも含まれた本企画は、参加者にタイの歴史や宗教、都市文化を体感させると同時に、教員・学生間の非公式な交流を促進する場となった。このような文化体験を通じたインフォーマルな学びは、異文化理解の深化とD&I教育の補完的側面として重要な役割を果たしたと言える。

4. 教育的意義と実践の成果

本シンポジウムは、国際的な大学間連携を基盤に、ジェンダー平等と多様性を主題とした対話と学びの場を創出する教育実践であった。特に、教員による理論的・実証的な講演と、大学院生による実践的かつ主体的な発表を同一の枠組みで行う構成は、多様な視点の交差を生み出し、従来の一方向的な講義形式とは異なるインタラクティブな学びを実現した点で高く評価できる。

第一に、国籍や文化的背景の異なる参加者同士が対話的に学び合ったことは、本シンポジウムの教育的意義を象徴する成果である。参加者には、日本、タイ、オランダ、ベトナム、ブラジル、アメリカ、イギリスの計7か国・地域の大学院生や教職員が含まれており、各国の性教育

やジェンダーに関する制度・社会的認識の違いが明確に浮かび上がった。たとえば、日本では学習指導要領に沿った限定的な性教育が中心である一方、オランダでは全国レベルで包括的性教育（Comprehensive Sexuality Education：CSE）が導入されており、幼少期からの性に関する教育が制度的に保障されている。タイにおいては、公立学校を中心に性教育の導入が進められているが、地域差や学校間の対応のばらつきが課題とされている。また、ベトナムでは家庭や学校での性教育が十分に行き届いておらず、若者が正確な情報にアクセスしにくい現状が指摘された。一方で、ブラジルではトランスジェンダーに対する社会的可視性が高まりつつある一方で、暴力や排除といった課題も顕在化しており、そうした状況の中で活動家のレジリエンスが社会変革の鍵を握っているといった報告もなされた。こうした制度的・文化的背景に基づく比較を通じて、D&Iにおける普遍性と多様性の両側面が再確認されるとともに、自国の制度や価値観を相対化する視点が育まれた（表2）。

第二に、大学院生が国際的な参加者を前に自らの研究を発表し、その後のディスカッションで教員や他の学生から意見を受けるという一連の経験は、発表者の自己表現力や国際的なコミュニケーション能力の涵養が図られた。特筆すべきは、発表後に設けられた意見交換の場において、各大学の教員から個別にフィードバックや研究的助言が与えられたことである。このような双方向的な交流は、学生にとって今後の研究の深化や国際的な学術的成長に向けた重要な契機となったといえる。

第三に、学術的な交流を超えて、学生間に相互理解と友情が育まれた点も注目に値する。たとえば、大阪大学からは在日ベトナム人留学生が、フローニンゲン大学からはブラジル出身の学生が参加しており、国籍や文化的背景の違いを超えた協働的な対話が、シンポジウムの合間や懇談の場において自然発生的に展開された。こうした人的ネットワークの形成は、見えにくいながらも国際

表2 D&I・性教育における国別特徴（筆者作成）

国・地域	性教育の実施状況	性の健康政策	特徴・課題
日本	限定的（学習指導要領中心）	一部保険適用	社会的タブーが根強い
タイ	地域差あり	公立校主体	地域間格差が大きい
オランダ	包括的性教育（Comprehensive Sexuality Education：CSE）を全国導入	幼少期から性教育あり	欧州型リベラル政策
ベトナム	家庭や学校での教育が不十分	若者への情報不足	性に関する話題がタブー視されがち
ブラジル	一部CSE導入の試みあり	NGO等による補完的支援あり	トランスジェンダーの可視性は高まる一方、暴力や排除も顕在化。活動家のレジリエンスが社会変革の鍵となっている

共同教育の中で継続的かつ実質的な成果として評価できるものである。

第四に、本シンポジウムの開催をきっかけとして、教員・学生間における将来的な共同研究や教育協働への発展が期待される点も重要である。大阪大学とマヒドン大学、ならびにフローニンゲン大学との間にはすでに学術交流の枠組みが整備されているが、今後は本シンポジウムを出発点とした草の根的な研究プロジェクトやオンラインフォーラムの形成といった、学生主導の協働的取り組みが広がる可能性がある。このような本シンポジウムを起点とする国際連携と学生主導の協働的取り組みは、D&I教育の国際実践を深化させる上で重要な一歩となる。

5. 今後への展望

本シンポジウムは、国際的な大学間連携を基盤とするD&I教育の一事例として、教育的・社会的に大きな意義を持つものであった。今後、こうした取り組みをより持続可能かつ発展的に展開していくためには、以下のような視点からの実践が求められる。

第一に、このようなシンポジウムの継続的な開催は、大学間ネットワークの強化に加え、国際的な教育機会の提供として非常に有効である。今後は、開催校の持ち回り方式やオンライン／ハイブリッド形式の導入などにより、より幅広い学生・教員の参加を可能にする工夫が求められる。さらに、発表者の対象を大学院生だけでなく、学部生や若手研究者にまで広げることで、D&I教育の早期展開とすそ野の拡大が期待できる。たとえば、テーマ別の分科会形式や、事前・事後課題を組み込んだ連携型ワークショップなどを導入することで、学びの継続性を高める試みが考えられる。

第二に、学生間の共同研究・共同活動の実質的な展開が今後の鍵となる。本シンポジウムを通じて形成されたネットワークを継続・発展させるためには、オンライン交流の場の確保、学生プロジェクトへの資金的支援、国際共著論文の執筆支援などの制度的整備が不可欠である。学生が自らの研究テーマを越えて他者と協働する機会は、D&I教育の深化に直結するものである。その一例として、参加学生による「D&I Youth Forum」の設置や、三大学合同によるSDGs関連の学生リサーチプロジェクト立ち上げなどが検討される。こうした学生主導の取り組みは、自律性と実践力を育む基盤となるだろう。

第三に、教員間における国際的な教育・研究協働のさらなる深化も重要な課題である。今回のシンポジウムでは、各国の多様性教育の実践例や課題が共有されたが、今後は専門分野ごとのワーキンググループの設置や、D&Iを主題としたカリキュラムの共同開発、教材の共創など、具体的な連携の枠組みが求められる。加えて、各大学で開講されているD&I関連科目の情報を集約・共有するオンラインポータルサイトの構築や、COIL (Collaborative Online International Learning) のような国際共同授業の試行的導入も有効である。これにより、教育と研究が互いを補完し合う、実践知と理論の統合的な国際連携が実現できるであろう。

最後に、D&Iや性の健康に関する課題は、依然として各国・地域において未解決の要素を多く含んでおり、その克服には多文化的・多分野的な知見の結集が不可欠である。本シンポジウムのような国際共同の取り組みが継続されることで、各大学が有する知的資源・人的資源を共有し、より具体的かつ実践的な社会的解決策を提示することが可能となるだろう。たとえば、市民団体や地域機関と連携したアウトリーチ活動、学生・教職員が共に学ぶD&Iセミナーの実施、現地フィールドワークの導入などは、社会実装を意識したD&I教育の次なる展開として注目される。

6. おわりに

本稿では、マヒドン大学・大阪大学・フローニンゲン大学の三大学による国際共同シンポジウムの企画・実施を一つの教育実践として位置づけ、その開催背景、構成、および参加者間の相互作用を通じて得られた教育的意義を検討した。本シンポジウムは、異なる文化的・社会的背景を有する学生および教員が、D&I、ジェンダー平等、性の健康政策といった複雑かつ繊細なテーマについて、対話と共創を通じて学び合う貴重な教育の場となった。なかでも、制度・価値観・言語の違いを超えて「共に語ること」「問い合うこと」そのものが、教育的営為として機能していた点は、本実践の最も大きな成果の一つであるといえる。

さらに、今回の取り組みを契機として、学生・教員間の継続的な国際交流や共同研究へと発展する可能性も拓かれている。実際に、三大学はD&Iを主題とする国際共同の教育・研究活動を今後も継続的に推進していく意向を共有しており、次回以降のシンポジウム開催もすでに計画段階にある。こうした継続的な取り組みを通じ

て、より実践的かつ相互的なD&I教育のモデルが構築されていくことが期待される。グローバルな課題であるD&Iに取り組むためには、単一の視点にとどまらず、複数の文化、制度、専門領域を横断する実践的な知のネットワークの構築が不可欠である。本稿で紹介したような、小さな国際的対話の積み重ねこそが、その第一歩となると確信している。

受付 2025.4.11 / 受理 2025.7.25

謝辞

本シンポジウムは、大阪大学国際機構（旧グローバルイニシアティブ機構）海外事業推進センター海外拠点部門ASEAN拠点の主導により開催されたものである。開催にあたっては、計画段階から当日の準備・運営に至るまで多大なるご尽力を賜りました、大阪大学国際部の楠雄登氏、ならびに共創機構イノベーション戦略部門の秋永真由氏、マヒドン大学国際部のPeungjai Tinsulanonda氏に、心より御礼申し上げます。また、本シンポジウムにおいて貴重なご講演を賜りました山本ベバリー・アン教授、知念歩准教授、Thomas E. Guadamuz准教授、Mónica Lopez Lopez教授に深く感謝申し上げます。併せて、ご発表いただいた大学院生の皆様（松本ミユ氏、Min Chau Pham氏、Gabriel Castro Siqueira氏、Itsada Ketsuwan氏）にも、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 2025年3月4日に開催された「Osaka-Mahidol-Groningen Joint Symposium on Social Creation through Diversity and Gender Equality」の記事は、マヒドン大学および大阪大学ASEANキャンパス事業の公式ウェブサイトを参照。
<https://mahidol.ac.th/2025/mahidol-osaka-groningen/>
<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/international/action/asean/activities/bolfeh>
(2025年4月5日 最終確認)
- (2) 大阪大学国際機構海外事業推進センター海外拠点部門欧州拠点のホームページを参照。
<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/international/overseas/nl>
(2025年4月2日 最終確認)
- (3) 山本ベバリー・アン教授は、2025年3月時点では大阪大学副学長を務めており、同年4月より大阪大学国際機構欧米拠点長に就任。

参考文献

- [1] 中央教育審議会（2018）『2040年に向けた高等教育のグラ

ンドデザイン（答申）』文部科学省.

https://www.mext.go.jp/content/1413715_008.pdf

（参照日 2025年4月5日）

- [2] 文部科学省高等教育局（2024）『大学の国際化にかかる施策の最新状況』日本学術振興会.

https://www.jsps.go.jp/file/storage/j-tenkairyoku/iinkai/r6/r6_pg03_1.pdf

（参照日 2025年4月5日）

- [3] 米澤彰純（2015）「高等教育改革としての国際化—大学・政府・市場—」『高等教育研究』第18集，105–123頁.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaher/18/0/18_105/_pdf
(参照日 2025年4月5日)

- [4] 藤田清士・サティダー カンジャマーポンクン・秋永真由（2025）「大阪-マヒドンインターナショナルオフィスの設置について」『生産と技術』第77巻，第1号，117-119頁.

<https://seisan.server-shared.com/771/771-117.pdf>

（参照日 2025年4月5日）